昭和五十八年十一月十四日　ご講演

「日本の将来―次代を担う青年達へ」

伊藤忠相談役　瀬島龍三先生

ただ今、理事長さんからご紹介を受けました瀬島でございます。今日は和敬塾にお伺いしまして、塾長先生、理事長先生はじめ塾生の皆さん方に私のつたない話を聞いていただきますことを、大変光栄に存じます。

和敬塾につきましては、もう随分前から私は伺っていました。塾長先生が三十年近く前に、全私財を投入して、国家社会の将来のために人材をつくるという理想をお持ちになって、ここに、こういう立派な塾をつくられて、その後、三十年近く数千名の人材を社会に送り出されて、皆、今、国家と社会のために立派にやっておられる。非常に歴史のある、伝統のある立派な塾であると、私は平素伺っていました。今日は幸いにしてこちらへお伺いしまして、親しく皆さま方のお顔を見てお話をできる機会を得ましたことを、本当にうれしく思います。塾長先生、理事長先生に心からお礼を申し上げたいと思います。

申すまでもございませんが、これからの日本はなかなか大変であると私は思います。殊に二十一世紀を考えました場合に、この日本を背負っていくためには本当にしっかりした人材がないと、国の将来はなかなか大変だと思うのでございまして、お若い塾生の皆さん方、どうぞしっかり体を鍛え、しっかり勉強し、またしっかりした意志を涵養されて、心豊かな人づくりということに、今後とも塾生として邁進していただきたいと思います。

私は今日まで七十年の人生でございますが、四つの人生を踏んでまいりました。先程、理事長さんも申されましたが、私の第一の人生は、日本陸軍の軍人としての人生でございました。二十歳で陸軍士官学校を卒業し、それから、皆さまご承知の昭和二十年、大東亜戦争の終結まで十三年間、日本陸軍の軍人としての人生でございました。

皆さま歴史でご承知かと思いますが、当時ちょうど、日支事変から太平洋戦争という、いわゆる国家にとって非常の時期でございまして、天皇陛下の下に大本営というのが設置されまして、私は二十六歳から三十三歳、終戦を迎えるまで七年間、大本営の作戦の参謀として勤務をいたしました。私はもともと陸軍の出身でございましたが、同時に海軍の参謀と連合艦隊の参謀と両軍にまたがる作戦の参謀としてこの七年間勤務をいたしました。

私の今申し上げました第一の人生を今から振り返ってみますと、一点の疑問なく純粋に、この五尺の体を国家に捧げるのだという、ただそれだけで一生懸命ご奉公の仕事をいたしました。純粋にそういう気持ちでこの十三年間、仕事をさせてもらいました。これが私の第一の人生でございました。

昭和二十年の八月、私はたまたま満洲で、現在で言いますと中国の東北地区にいまして、皆さまご承知のとおり、八月十五日、日本は天皇陛下の命令によって終戦を迎えることになりました。当時、八月九日から満洲にはソ連軍百十万が攻めて入っていまして、関東軍六十万と

交戦状態になっていました。国際慣例に基づきまして軍使が出て相手側と停戦の交渉をする——これは国際的な慣例でございますので、八月十九日に私は軍使としてソビエトへまいりました。そして、先方の司令部との間で停戦の交渉をいたしました。また、いったん満洲に戻りまして、九月六日、私どもは捕えられて、関東軍六十万の将兵と一緒に私もシベリアに送られました。翌年、昭和二十一年、私は日本大本営の参謀であったというかどによりまして、即決で重労働二十五年という刑を向こうで受けました。そして翌日から重労働に服しました。

昭和三十一年、日本に帰りますまで十一年間、労働に服しました。伐採にもまいりましたし、石炭掘りにもまいりましたし、シベリア鉄道の貨車の荷下ろしもいたしましたし、いろいろの土工作業もいたしましたし、およそ重労働のほとんどのことを体験いたしました。とてもあの極寒の地で重労働をしては二十五年生き抜けないと思いまして、手職を覚えたほうがいいということで、私は弟子入りをして、左官屋になりました。壁塗りです。お若い皆さん方はご存じないかもしれません。終戦のときは私は陸軍の中佐でございまして、佐官でございましたが、私はシベリアで壁塗りの左官屋になりました。昭和三十一年八月、日本に戻ります前日まで壁塗りをいたしていました。

シベリアは非常に寒うございますから、建物の内側も壁を塗ります。私のような無器用な者でも十年以上、ノルマ、ノルマで朝から晩まで壁を塗っていましたので、今でも私のこの壁塗りの腕は相当なものであると私は思っています。和敬塾でどこか壁を塗るようなときは、日当は要りませんから、どうぞお雇いいただけばいいと思います。シベリアにおけるこの十一年間が、私にとって第二の人生でございます。

この第二の人生は、明日の自分の命がどうなるか分かりません。日本との間は完全に音信不通であります。日本の新聞もラジオも雑誌も十一年間見ていません。私の家族にとっても、十一年間、私は行方不明でございました。まず明日の命がどうなっているか分からない、そして毎日がおなかが空いてペコペコでありました。寒いときは零下四十度、五十度という日もありました。そして労働は大変厳しいものでありました。また、申すまでもなく、人間にとって大切な自由というものが完全に束縛されていました。人間が生活をしていくという十一年ではなくて、人間が一日一日をどうして生存していくかという十一年であったと思います。

しかし、私ども一緒の運命に遭っていました日本人は、いつの日か再び祖国の土を踏めるだろうという淡い希望を持って、毎日毎日、皆で助け合って、しかも日本人としての誇りを失わずに生き抜いていこうと、十一年を生き抜いたわけでございます。今振り返りまして、この第二の人生は再び得難い、いろいろの教訓を私に与えました。例えて申し上げますと、人間とは一体何であるのか、人間にとって一番尊いことは何であるのか、人間にとって絶対にしてはならないことは何であるか。こういう環境におきましては、裃を着て、オブラートに自分を包んで生き抜くことはできません。みんなが裸でなければ生き抜けません。ぎりぎりの生活でございます。

毎日与えられる黒パン、それを全部食べてもおなかがいっぱいにならない。それなのに、戦友が病気にかかるとそのパンの半分なり三分の一なりを切って、「お前、早くよくなれ」と言うて分け与える人もいます。これは皆さま、なかなかできることではありません。腹ペコであって、六百五十グラムの黒パンを全部食べても自分が腹が膨れないのに、病気の友達のためにそれを分けて与える、こういうことはなかなかできるものではないのであります。私はいつもそういうことに接していまして、私が得ました教訓として、人間にとって一番尊いことは自らを犠牲にして人のため世のために尽すことだということを、この十一年間のぎりぎりの生活の中で体験しました。これが最高の道徳であ

ると私は信じています。

したがって、階級が上だとか、おカネが余計あるとか、学歴が高いとか、そういうことよりも、偉いということは、ただ今申し上げました、人のため世のため自らを犠牲にして尽すという最高の道徳を実行できる人が一番偉いのだ、私はこの第二の人生のシベリアの体験で、そのように現在でも信じています。これが私にとりまして、今振り返って、第二の人生における最大の教訓でございます。

昭和三十一年の八月に、私ども日本人四百名は——六十万人シベリアに捕まっていって、最後に残された者が約四百名でございます、私もその一人でありますが——突然、夜中に起こされまして、外の見えない有蓋貨車に乗せられまして、一昼夜、汽車で運ばれまして、汽車が停まって外へ出たら、それが日本海の対岸のナホトカという港でありました。港の岸壁で潮のにおいを十一年ぶりにかぎました。この潮のにおいの向うには我々の祖国があるんだ、しかし我々は果して日本に帰されるのか、あるいは、この前、大韓航空機の事件がありましたあのオホーツク海の方に持って行かれるのか、それは分かりませんでした。知らされていませんでした。

夜が白々と明けるころ、私どもは岸壁にあぐらをかいて座っていました。だれかが立ち上がって、「日本の船だ！」と怒鳴りました。私どもは皆、立って港の沖合を見ますと、マストに高く日の丸の旗を翻した、まぎれもない日本の船が港の沖から岸壁に向かって入ってまいりました。私どもは十一年ぶりに日の丸の旗を見ました。やはり我々を迎えてくれる祖国があったというのが、そのときの印象でございまして、四百名は岸壁に総立ちになって、顔をクシャクシャにして涙を流しました。これが日本赤十字から我々を迎えにきた引揚船興安丸でございました。私どもはこの船に乗って舞鶴に帰ったわけでございます。全く浦島太郎で、戦後十一年にして再び舞鶴の土を踏みました。

舞鶴で厚生省のお役人が、「長い間ご苦労でした、これを差し上げますから第二の人生をしっかりやってください」と言って、我々に一万円ずつ渡されました。もちろん私どもは印鑑を持っていませんし、皆、拇印で受け取りをいたしました。真っ黒な木綿のソ連の囚人服を着て、腰にタオル一本ぶら下げて我々は舞鶴に上陸したわけでございます。一万円というおカネは、戦前は大変大きなおカネでございますが、私どもはこの十一年という日本の状況は全然知りませんから、一万円というおカネの値打ちも、戦前の感覚でこれを受け取ったわけです。十一年間、一切アルコールを飲んでいません。十一年間、お米のごはんも食べていませんので、再び日本のあちらこちらへ散って行きますので、この生死を共にしたみんなと、舞鶴の引揚寮でビールを買ってきて、お米のごはんでお別れの宴をいたしました。懐に一万円を持っているからなんぼぜいたくにやってもいいと思っていましたところ、いよいよみんなでおカネを払う段になったら、戦前の一万円と全然値打ちが違ってしまっている。これが日本上陸の第一の印象で、やっぱり日本は変わったんだなと思いました。そのような浦島太郎でありました。

みんなで東京にまいりまして、宮城前にまいりまして、宮城遙拝をして、二重橋の前で四百名は解散式をいたしました。二十五年の刑を受けて十一年で帰ったわけですが、どうしてそうなったかということは、日本に帰って初めて分かったのでございます。当時、鳩山内閣でありまして、鳩山総理大臣がモスクワにおいでになって、最後に残されている私ども四百名を釈放するということを前提の条件にして、日ソ国交回復の交渉をなされたわけでございます。そのおかげで、私どもは昭和三十一年に再び生きて祖国の土を踏むことができたわけでございます。以上が私の第二の人生でございます。

日本に帰りまして、健康を回復しなければなりませんし、私が連れて帰った部下の人たちの就職も、できる範囲でお世話をしなくてはならない、そういうことをやっていましたが、私自

身もこれから先、生活をどうしようかと随分悩みました。陸軍士官学校、陸軍大学校ではソロバンだとかビジネスとか、そういうことは一切教えませんから、これから先、自分自身はどういう生活をしていったらいいのか、非常に悩みました。

かつて私が軍にいましたときの部下の人たちで、戦後、成功した人たちが、みんなで心配をしてくれまして、「教官殿、よそへ行かずに私の会社へいらっしゃい、月給二万円か三万円差し上げるから、悠々と暮らしてください」ということを私に言ってくれました。当時の私にとっては、本当に有り難い誘いでございました。しかし、私もひとの好意に甘えてこれからの人生を過ごしていくことが自分の心にどうしても割り切れませんでしたので、そちらへ行くことはできなかったわけでございますが、たまたま、現在います伊藤忠商事から誘いがかかってまいりました。伊藤忠という名前はそのとき初めて私は知りました。一体何をやっている会社か、それも知りませんでした。また、私が知っている人はだれ一人伊藤忠という会社にいないわけでありました。ただこれも、会社に入ってから、後から分かったことなのですが、シベリアから帰ってきた中にこういう人がいて気の毒だ、そういう人を一人でも二人でも会社においてもいいのではないかという軽い話でそういう話が出て、誘いがかかってきたのが事実のようでございます。

私は世の中の経済社会のことはよく分かりませんので、親友に相談をしましたら、こう言いました。「お前、どうせ会社に入っても仕事は分からないから、片隅で新聞を読んでいるように必ずなる」。今の言葉で窓際族という言葉があります。が、当時はありませんでした。「片隅で新聞を読んでいるようになる。だから、小さい会社だと目立つから、なるべくでっかい会社へ入っていると新聞を読んでいても目立たないから、でっかい会社へ入ったほうがいい。この伊藤忠というのは、お前のところへいろいろ言うてきている会社の中では一番でっかいから、ここへ入ったほうがいい」ということを私に教えてくれました。この親友は今、国会議員をしていますが、彼が私にそういうことをアドバイスしてくれました。なるほどそうだなと思いまして、そこで私は初めて伊藤忠に履歴書を出したわけでございます。

小説やいろいろな書き物では、当時の伊藤忠の社長が三顧の礼で私を迎えたと、こういうふうになっているようでございますが、これは皆さま、小説でございまして、今、私が申し上げたのが事実であります。新聞を読んでいてもでかければ目立たない、というので、ああ、そうだな、と思って履歴書を送ったら、採用通知が来たということでございまして、したがって、そのときは私の年齢は既に四十代の半ばにいました。

そういう経緯で入りましたから、伊藤忠に入ったのも、昭和三十三年に、完全に平の、普通の社員で入りました。今、三十三年入社の人たちと、花の三十三年会というのをつくりまして、毎年十二月になったら、花の三十三年の忘年会をやっていますが、大学を出て三十三年に入ってきたのと、私のように四十代半ばで入ったのと一緒に花の三十三年会をやっています。しかも、これも後から分りましたが、仮採用三ヵ月という期間が私にありまして、三ヵ月間顔を見て、これは駄目だとなったら採用取り消しという、仮採用期間があったわけでありました。私の第三の人生はこういう経緯で企業社会に入ったわけであります。

会社に入って、タイピストと並んで席を与えられました。会社の中で一番困りましたのは、まず言葉が分かりませんでした。皆さん方は学校で教わっておられるから当然知っているのですが、私のように軍人の社会で育った者は、ビジネスの用語は一切教わっていません。社員が棚卸というような言葉を盛んに使う。殊に月末になると棚卸、棚卸と言う。私はそういう言葉を聞くと、頭の中で、棚から物を下ろすということは商売でどういうことになるのか、こう

いうふうに考えなければいけない。あるいは、貿易会社でございますから、アメリカのシカゴで穀物類を買い付けして日本に持ってきて売る。買い付けた値段と日本で売る値段とがマイナスになっていると、これは逆ざやと言うんです。逆ざやとか本ざやとか社員が言っている。日本刀を逆さに差すことは一体どういうことになるのか、こういう言葉の理解に非常に苦しみました。

そのころ九段下の神田の古本屋に行って、こういう言葉を分りやすく書いた本がないか探しに行ったことがあります。一冊みつかりまして、家に帰ってよく読んでみても、結局はよく理解できない。あるいはまた一ヵ月に会社は五百億の商売をしているとか、一千億の商売をしているとかいうことが会社の公式のリポートに書いてある。社内を見渡して品物は一つもない。電話機が鳴る、国際電話がかかる、タイプライターが鳴っている、社員が立ったり座ったりしている、目に見えるのはそういうことです。そして、月に五百億とか一千億のビジネスが一体どういう仕組みで成り立つのか、これが理解できませんでした。三越に行って千円札を出して品物を買う、これは私、すぐ理解できますが、品物は一つもない、そして五百億の商売ができたとか千億やっているとかいうこと、この仕組みが私には理解できませんでした。以来二十年たちまして今日まで、結局は本当の具体的なところまで理解せずして終わってしまったように思っています。

このようにして二十年以上たちました。その間に社員の皆さんに助けられて、部長、本部長、役員をやって、会長までやりました。ただ、この私の第三の人生は、世界を相手に貿易をやっている会社でありましたことから、部長になりまして以後、一年間に少なくも十回、多いときは十五、六回、海外に出張をいたしました。これは、貿易会社というものは当然でございますが、私の今日までの海外出張は、細かく勘定していませんが、恐らく三百回ぐらいだろうと思います。そのおかげで、世界百六十ヵ国の半分以上の国はこの足で行き、この目でその国を見、またそれらの国の方々とお話をする機会を与えられました。私はこの第三の人生で、ただ今申し上げました海外への出張を通じまして、日本から世界を見るだけでなくて、世界から我々の日本を見る機会に恵まれたことが、私の第三の人生で最も有益であったと思っています。日本から世界を見るだけでなくて、世界から我々のこの日本を見ることができたことは、私の第三の人生で最も得難い体験であったと思っています。

一昨年、昭和五十六年の二月下旬に、そのときの行政管理庁長官の中曽根先生から、三月にできる臨調（臨時行政調査会）の委員になって、というお話がきました。私はびっくりしたのでありますが、しかし、この中に行政学を勉強なさっている塾生の人もおられると思いますが、行政について改革の意見を出すためには、行政全体の仕組みがどうなっているか、行政と政治のかかわり合いがどうなっているのか、行政と民間との関係がどういうふうになっているのか、同時にまた、国家の行政というものは法律によって行われているわけでありますから、法律的な知識を必要といたします。ですから、私は臨調の委員になることにつきましては、とてもそういう仕事は私にはできないと思っていました。

たまたま土光（敏夫）さんから直接お電話をいただいて、会いたいと言われました。経団連の会長室へ伺いました。そしたら、二人だけになりましたら、土光さんが私にこう言われました。「瀬島さん、私も八十五歳になった。蔵前高校を出て造船会社に入って、それから石川島播磨重工業を立て直して、そして経団連の会長までやらしていただいた。後、何年生きるか分からんけれども、国家のおかげで自分の今日はあったと思う。日本の国は高度成長の惰性でやってきてるけれども、このままでは遠からざる将来、国はいろんな面で行き詰まりを来すと思っておる。たまたま鈴木総理大臣から中曽根長

官を通じて臨調の会長になってくれという話がきたが、よく考えた結果、国家に対する最後のご奉公だと思って臨調会長を引き受けることに決心をした。あなたもいろいろな運命を経てきたのだけれども、ひとつ臨調に入って自分を助けてほしい」と、このようにあの土光さんがしみじみとした口調で私に申されました。皆さん方も恐らく同じでありましょう。自分の尊敬する人から助けてくれと言われたら、それで勝負あり、であります。返事を保留するとか、条件を付けるとか、そういうことは男としてできるものではありません。私は「すべてをお任せします」と土光さんに言いました。私はそういう経過で、五十六年三月発足の臨調に入ったわけでございます。

　政府に中央教育審議会というのがございます。これは現在、問題の教育に関する国の最高の審議会でございます。臨調に入りまして以降、この委員、あるいは今年の七月、国の安全保障、国家の安全をどうして保っていくか、国の平和と安全をどうして保っていくかということで総理大臣の下に、平和問題研究会というのが設置されました。このメンバーもやらしていただいて、ただ今、私は第四の人生でございまして、国の仕事について、ほとんど至りませんが、お手伝いをしているというのが今日でございます。

　私は、先程申し上げました軍人としての第一の人生、人間としてぎりぎりのシベリアの十一年、企業の社会に入って二十年、そして今日お国の仕事のお手伝いをしている。私は今日まで七十年の人生を、ただ今申しましたような四つの人生を経て、今日に至っているものでございます。

　私事にわたることを申しましたが、皆さん方に申し上げました私のこの四つの人生を、一言で何か結論づけるならば、「我々の日本は本当によい国だ」、これが私の人生の結論であります。堅く信じています。私の人生の結論を一言で申し上げますれば、「我々の日本は本当によい国だ」と、このように信じています。本日の塾生の皆さん方も、私が申しますほかのことはお忘れいただいて結構でありますが、日本は本当によい国なのだ、このことだけはどうぞ忘れないでいただきたい。ほかのことはお忘れいただいて結構でありますが、そのことをお願いしておきたいと思います。

　皆さま、我々の日本は国土は狭うございます。日本の国土の広さは全地球の陸地面積の約四百分の一の広さであります。〇・二五％ぐらいです。しかしながら、将来、皆さま、海外をずっと回られたらお感じになりますとおり、国土は狭くとも、このように山紫に水清い国は世界に少ないと思います。国の一部がきれいなのではなくて、日本の場合は国土全部が山紫に水清い国でございます。論より証拠、日本は国内どこへ行っても生水を平気で飲める国でございます。ロンドンに行っても、パリに行っても、ニューヨークに行っても、ワシントンに行っても、生水を飲みたければおカネを出してビン詰めの生水を飲まなければなりません。ましてアフリカ、中南米、中近東……絶対に生水は飲めません。日本はどこへ行っても生水を平気で飲める国土であります。生水が平気で飲めるということは、何よりも山紫に水清いという証拠であります。そしてまた、春、夏、秋、冬の四季の営みが、こんなにきれいに営まれている国土、これも世界で珍しい国であります。日本は冬でも冬の花が咲いています。夏でも夏の花が咲いています。国土は狭くても、美しい自然にこれだけ恵まれている国は世界に数少ないと思います。

　そして、そこに我々国民一億が住んでいるわけでございます。皆さん、この一億は歴史と伝統と文化と言葉を等しくしている単一の民族であります。日本は一億一民族で一国家を形成している国であります。世界に一億以上の国は七つか八つあります。一番大きいのは申すまでもなくお隣の中国であり、インド、ソビエト、アメリカ、ブラジル、インドネシア、日本という国が一億以上の国でございます。しかし日本

を除くほかの国は皆、多民族の複合国家であります。多民族複合国家というものが国内的に、社会的にいろいろの問題があるということは皆さまご想像の通りであります。アメリカでもホワイトとブラックの問題があります。ヨーロッパのスイスという国、人口四、五百万の自然の美しい、きれいな国であります。あの国の中を旅行してみますと、同じ国内で、こちらの町でたばこを買うときはドイツ語で買わなければなりません。こちらの町でたばこを買うときはフランス語で買わなければならない。

数年前に、日本の財界からユーゴスラビアという国に経済のミッションが出ることになりまして、私に団長で行けと言われまして、企業の社長さん、六十人ほど連れてユーゴスラビアに行きました。あの国に行って、国内をいろいろ回ってみました。ユーゴスラビア連邦は六つの共和国から成り立っている連邦国家です。民族が五つ、言葉が四つ、宗教が三つ、文字が二つ、こういう国でした。非常に複雑な複合国家です。これは一つの例でありますが、それに比べますと我が国は単一民族で、文化と伝統と言葉を一つにしている、それで一国家をつくっている国であります。お隣の朝鮮民族は一民族が南北に分割されています。ドイツ民族は一民族が東西に分割されています。日本は戦争に敗けました。しかし一民族として、一国家として残ったということであります。また、我々の国の国内の体制は、これも皆さまご承知のとおり、戦後の新しい憲法によりまして、自由主義と民主主義を根幹にした体制をとっています。政治の体制も経済の体制も社会の体制も、自由主義と民主主義を根幹にした体制をとっています。人間にとって、自由であるということがいかに尊いかということは、これは先程申し上げました私の第二の人生、シベリアの十一年によって、私は自由がないということがいかに苦しいかを、体験を通じてつくづく感じています。皆さま、現在、世界人口四十億の中で、今日現在、生命の危険にさらされている人たち、これは世界中に大体一億五千万います。世界のあちこちにいろいろな事件が起きています。局地の戦争が行われています。例えば、イラン・イラク戦争、レバノンにおけるいろいろな戦闘行為、この間ありましたグレナダの問題、ニカラグアの問題、世界のあちこちに鉄砲の撃ち合いが行われています。こういう人たちは生命の危険にさらされているわけです。それが全世界で今日現在、約一億五千万います。腹いっぱい食べられない人たち、これは世界で六億ないし七億います。人間にとって尊い自由の拘束を受けている人たち、これは世界人口の半分います。言論、集会の自由、まして海外旅行の自由、こういう人間にとっての自由を全部か半分か一部か、いずれにしても拘束されている、制限されている人は世界人口の半分います。どの国ということは申し上げなくてもご想像のとおりです。生命の危険に今日さらされている人が一億五千万、腹いっぱい食べられない人が六億、自由のない人が二十億、こういう世界の現状を考えて、我々の日本を考えてみますと、申すまでもなく日本はいかに有り難い条件にあるかということがお分りいただけると思うのでございます。我々国民の生活程度、衣食住におきましても、あるいは文化生活の面から見ましても、テレビの普及率とか、クルマの普及率とか、就学率とか、こういう文化生活の面から見ましても、今や世界の上位のレベルにございます。これは世界を回ってみればすぐ分る問題でございます。日本のＧＮＰの二倍がアメリカのＧＮＰでございます。しかし、人口比で割りますと、日本の人口に対してアメリカの人口は二倍でございますから、一人パーヘッドのＧＮＰは今や日本はほとんどアメリカと同じくらいであります。

そういう国民生活のレベル、それは一国の経済力があるから国民生活のレベルが上がっているわけでございます。現在の我が国の経済力は、新聞でご承知のとおり、今や世界全体の経済力の約一割であります。例えば生産の面から見ますと、基幹産業の製鉄を見ますれば、我が

国の製鉄量、約一億トン。今、世界全体の製鉄量は約七億トンです。我が国の製鉄量は世界の約一五％です。自動車の生産、我が国は約七百万台ぐらいであります。世界全体の自動車生産の二五％ぐらいに当たります。いろいろの電気関係の製品、これは少なくとも世界全体の生産の二〇％をしています。造船、日本は世界全体の造船の五〇％です。生産の面から見てもそういう状況です。全世界の貿易、物の動きの中で、日本の貿易は、昨年は全体の一三％です。国際金融市場における我が国の金融の力、これも大体一割です。こういうことを引っくるめて日本の経済力を見ますと、世界全体の経済力の一割であります。先程申し上げましたとおり、国土の広さは全地球の陸地面積に対して〇・二五％です。人口は四十億に対して一億です。二・五％です。経済力は一〇％です。〇・二五と二・五％と一〇％。我が国と世界を、簡単に対比しますとそういう数字になるのであります。皆さま、先程私が、私の人生の結論として申し上げましたが、日本は本当によい国なのであります。そして、このよい日本を我々が祖先から受け継いだわけであります。したがいまして、祖先から我々が受け継いだこのよい日本をよりよい日本として、我々の子孫に、二十一世紀に、伝えていかなければならない。それが我々の祖先に対する責任でありますし、我々の子孫に対する責任であると思うのであります。

さて皆さま、今世紀末まであと二十年足らずであります。これから先の二十年、日本をめぐるいろいろの環境を考えました場合に、過去の二十年、日本が歩んできた道よりも、これから先の二十年、日本が歩んでいかなければならない道ははるかに厳しいだろうと私は思っています。日本を取り巻く国際情勢を見ましても、皆さま毎日の新聞をご覧になってお感じになりますとおり、人類が世界の平和を請い願っていますが、世界の現実はそうではなくて、いつ何が起こるか分からないという現在の情勢であります。これが現実であります。我々は皆さまも私も、だれ一人として世界が戦争になることを欲しません。しかし、世界の現実はむしろそれと逆の方向に行っています。いつ、どこで、何が起きるか分からないという厳しい現実であります。

世界経済も、かつてのような高度成長という時代は、恐らく今世紀中にはないだろうと私は思っています。世界経済が再びバラ色の二けたの高度成長になることは、そういう理由も背景もございません。そして日本経済は――後程申し上げますが――全く世界経済の一環でございます。世界が高度成長がないとすれば、当然、日本も高度成長は再びございません。経済全体は厳しい情勢の中で進んでいくと思われます。

日本国内のこれから先の問題としても、いろいろ問題を抱えています。例えば、老齢化社会これは不可避でございます。私もその一人でありますが、六十五歳以上の人口が総人口の約一割でありますが、今世紀末には人口構造が変わって、いわゆる六十五歳以上が二割になってまいります。人間が長生きできるということは福祉の中で最もいいことであると私は思います。長生きできることは大変いいことであります。ですが、世界の例を見ますと、老齢化社会というものは社会の活力を失いやすいものでありますす。我々の日本はそういう人口の構成になっても、いかにして活力を持った日本の社会にしていくかということは、これから先、国家として大きな課題でございます。

あるいはまた、国のお台所であります国家財政でございます。日本の国家財政は現在、火の車であります。大変なピンチであります。私ども民間の企業を経営する感覚から見ますと、完全な破産でございます。国の財政だから破産しない。何が原因かということについてあらましご参考に申し上げてみますと、国の財政が、台所が、火の車でピンチだという最大の原因は借金であります。では一体どのくらい借金があるのかという問題。今日現在、政府の借金というのは国家の借金ですが、これは百六兆円であります。全国の地方自治体の借金、例えば東京都

の借金、あるいは栃木県の借金、群馬県の借金、こういう地方自治体の借金のトータルは約五十兆円であります。だから、二つ合わせますと百五十六兆円の借金がある。国の借金というのは、皆さんご承知の、例の建設公債、赤字公債。公債を発行した。公債というのは政府にとっては借金です。借金ですから、これは当然利息がかかります。無利息な借金というものはあり得ません。百五十六兆円の借金に対して、年間の利息が約十二兆円かかります。

どうしてそのような借金ができてしまったのか、ということに触れてみたいと思います。それは、分かりやすく申し上げますと、今年の、昭和五十八年度の国の予算、これを見ればすぐ分かります。これは予算として国の歳出、いわゆる出ていくおカネが約五十兆円です。政府に入ってくるおカネが三十七兆円です。三十七兆円のうちの三十二兆円は税金で政府に入ってきます。あなた方はまだ税金を納めておられませんが、社会に出られたら、すぐ税金を納めなければなりません。五兆円は税金以外の政府の収入でございます。例えば国有財産を処分する、こういうような、税金以外で政府に入ってくるおカネです。今年の予算で申しますと、五十兆円おカネが出て三十七兆円が入ってくる。そうすると足らない十三兆円はどうするのか。これが公債になって借金でやっているわけです。

分かりやすく申しますと、年間の収入三百七十万円のサラリーマンが、年間百三十万円の借金をして、五百万円の生活をしているという現状です。そういうふうにご理解下さい。こういう状態が第一次のオイル・ショックからずっと続いているわけです。そういうことが積み重なっていきますれば、借金が当然どんどん増えていく。そして先程申しました、国の借金百六兆、地方自治体の借金五十兆円とこうなってきたわけです。百五十六兆円の借金ということは、一億国民一人頭に割りますと、皆さん方一人ひとりは国民の一人として百五十六万円の借金を持っている。そして、一年間にその利息十二万円を払っていかなければならない、こういうふうにご理解になればいい。人口一人頭の借金としては、日本は世界でも最も大きな借金を持っている国であります。我々は国家の将来を考えたら、このアンバランスな国の財政を、入るほうと出るほうを、当然バランスさしていかなければならない。一家の家計と同じです。企業の会計と同じであります。入ると出るのバランスをするということが、財政健全化の基礎です。

それではどうするかという問題。これは我々、臨調で大変に大きな問題として扱い、大変に議論をした問題であります。まず考え得る方法は、五十兆に対して十三兆をぶった切ってしまう、出ていく方を三十七兆にしてしまえばバランスがとれます。もしくは、三十七兆の大増税をやって、言い換えますと約四割の増税をやって、入るほうを五十兆にする。出ていくほうを削るか入るほうを増やすか、まず考える方法はそういうバランスの方法です。これは常識的な考え方としては当然考え得ることであります。しかし、国の現実は五十兆から十三兆をぶった切るとなると、日本の行政はストップします。逆に十三兆の増税をやったら、国民の生活、企業の経営、これもストップします。四割増税になりますから。そういうことは言うべくして簡単にできない。私ども臨調が主張していますし、政府もその方向で一生懸命、今やっていますが、要は、やはり一家の会計を建て直すのと同じ、出ていくほうで無駄なもの、効率の悪いもの、余計なもの、これをできるだけ切り詰める、これが先決である。国家はどうしても破産できませんから、その上で、どうしても足りないものについてはお台所を国民の前に明らかにして、国民の負担を仰いで財政を――一挙にいきません、五年か七年か十年かかります――健全化していくというふうにすべきであります。臨調がいつも増税なき財政再建と言っています趣旨は、まず無駄を削りなさい、ということであるのでございます。我が国の財政を健全化していくことは、これから先、大変大きな問題であると思います。これからの二十年、以上申しま

したような、内におきましても外におきましても国をめぐる環境は大変厳しい環境であります。しかし皆さん、我々のこのよい日本です、国民全部が力を合わせて、これを乗り切っていかなければいけないと思います。

そこで次に、乗り切っていくという前提の下に、これから先の日本の進んでいく方向は一体どうなければいけないのか、国家の在り方はどうあればならないのか、国の重要な政策はどうなければならないのか、我々国民の心構えはどうなければならないのか、これから先の日本の将来を考え、殊に皆さん方が社会の中堅として、国と社会を背負っていく二十一世紀を考えた場合を展望して、国家の方向、国家の在り方、国家の政策、国民の心構え、そういう問題につきまして、以下、私の考えているところを申し上げてみたいと思います。

まず第一に、その問題をご理解いただくために申し上げたいと思いますことは、一体、日本国家の特質は何であるのかという問題です。皆さんがご自分の将来進むべき方向を考える、学校の選択とか、あるいはどういう方面に進むかをお考えになる場合、やはりご自分の特質、それを考えてみなければなりません。それと同じです。日本国家の特質は何であるのか、この問題について第一に申し上げたいと思います。これはいろいろの見方、いろいろの考え方がございます。学者によってもいろいろな説がありますが、少なくとも次に申し上げますことが、非常に大事な特質であると私どもはとらえています。それは、結論的に申し上げますと、我々の日本は資源のない、反面において膨大な資源を必要とする大工業国家であります。資源がない、しかし反面において膨大な資源なしには動いていかない大工業国家である。そのスケールは世界経済の一割であります。私は端的に結論づけて、そのように思います。皆さまのお父さんやおじいさんの時代、すなわち明治の、資源のない日本は農業国家でありました。大正、昭和の初期の日本は資源のない農業と軽工業の国家でありました。私が小学校のときに、日本の輸出の第一が生糸でありました。お蚕さんで取れるあの生糸です。今の日本は資源のないことは同じですが、大工業国家であります。大工業国家は資源なしには一日も動きません。これが現実であります。そしてこの姿は、この特質は恐らく二十一世紀も変わらないだろうと私は思います。

それでは、その特質からどのように現実、物事が動いているのかということに話を一歩前へ進めてみたいと思います。こういう特質だから、日本は一年間にトン数にして約六億トンの資源原料を世界から日本へ持ってきています。この六億トンの資源原料の中で一番大きいのは、申すまでもなく油であります。石油であります。六億トンの中に約二億二千万トンぐらい油が入っています。今、我が国の国家全体のエネルギーの七割は石油です。残り三割が原子力とか水力とか石炭とかであります。日本は国家全体のあらゆるエネルギーの七割は石油です。話は余談へいきますが、国家全体のエネルギーの七割が石油であって、この石油は、日本は百％輸入をしているわけです。そしてその輸入先の七割がペルシャ湾です、中近東です。我が国のエネルギー構造というのはそういうふうになっています。

六億トンの資源原料を持ってきている。ただで持ってこれませんから、見返りに七千万トン製品を出しています。この七千万トンの中で一番大きいのは自動車、約五百万台です。トヨタ、日産、マツダ、その他の自動車、約五百万台。皆さん、今日一日に日本のどこかの港で一万数千台の自動車が船積みされて太平洋に出ていってるわけです。年間五百万台の自動車を出しているわけです。資源のない大工業国家が動いていくためには、六億トン入れて七千万トン出していかなければならない。こういう姿にならざるを得ないし、それ以外に生きていく道はありません。そして、六億トン入れて七千万トン出していく、この循環によって日本の生産が存在しているのです。

例えば、新日鉄という会社を考えた場合、申すまでもなく生産会社です。新日鉄が必要とする鉄鉱石も石炭も油も、六億トンの中の一部が新日鉄に入っています。新日鉄がつくった薄板、厚板、製品は七千万トンの一部として外へ出ていっている、もしくは新日鉄の薄板はトヨタ、日産の自動車となって出ていっているわけです。新日鉄という生産企業は六億トン・七千万トンの、この循環の外ではなくて中にいるわけです。この循環の外にいては新日鉄という生産企業は成り立ちません。日本のほとんどの生産は、この六億トン・七千万トンの循環の中に存在しているわけです。

また例えば、皆さん、日本は米は自給自足している、こうお考えになるかもしれませんが、昔と違って今の農業は全部機械です。機械によって農業生産が行われている。機械によって行われるということは油によって行われているということです。国家が必要とする二億二、三千万トンの油の中で、少なくとも農業に六百万トンぐらいは使われています。油がストップしたら米の自給自足はできません。農業生産といえども、今申し上げました六億トン・七千万トンの循環の中に存在しています。生産が存在しているから、ここで当然流通が起きます。生産と流通があるから、そこで当然、第三次産業が起きてきます。生産、流通、第三次産業があるから、ここで国民の大多数の勤め口が生じてきています。生産も流通も三次産業もないところに国民の勤め口はありません。同時にまた、それによって、国家をマネージメントしていくための税金もそこから生まれてきています。生産、流通、第三次産業、雇用、これのないところに税金は生まれるはずがありません。所得税、法人税、国税、地方税、みんなこの生産、流通、第三次産業、雇用があるから税金が取れるのです。

皆さん。先程申しました日本の特質は、六億トン入れて七千万トンという形で、その結果として生産、流通、三次産業、雇用、税金がある。細かいことは別として、我々の日本国家はこういう仕組みで生きている国家です。この仕組み以外で日本国家が生きていく仕組みはないと私は思います。なにほど頭のいい学者が考えても、国家の特質から見て、ただ今申しましたような仕組み以外で生きていく道はありません。我々国民の生活はこの仕組みの中で確保されているわけであります。このことは、我々国民として本当にしっかり理解しておかなければならない大事な問題であると私は思います。我々の国家はどんな仕組みで生きているのか、我々国民の生活はどういう仕組みで確保されているのかということは、今申し上げたとおりであります。そのよってくるゆえんは、先程申しました日本国家の特質であります。このことは二十一世紀も同じでございます。六億トンとか七千万トンとかいう数字とか、その内容は変わっていきますが、この仕組みは変わらないと私は思います。

皆さん、そうしますと、日本国家の在り方、日本国家の将来の方向、国家にとってどういう政策が一番大事かというような問題を考えるときに、何にしろ、この仕組みで国家が生きているのですから、どうやって安全に安定して円滑にこの仕組みが動いていくようにすべきかということが、非常に大事な問題であります。日本の国の在り方、日本の国の方向、日本の国のあるべき政策は、要はこの仕組みを最も安全に安定して円滑に動いていくようにすることが原点であります。原点でなければならないと思います。人間が生きるということ、国家が生きるということ、これが根本であります。どうしたらその生きるという仕組みを円滑に動くようにもっていけるかというところに、最善の努力が傾注されなければならないと思うのであります。そういうふうに問題を考えました場合、それではそういう考え方に立って、一体何が大事かという問題について更に、一歩話を進めてみたいと思います。ただ今申しましたような仕組みを、どうしたら安全に安定して円滑に動いていくようにできるかという方策につい

て考えてみたいと思います。

まず第一に申し上げたいと思いますことは、皆さん、世界が戦争になってしまう、あるいは日本が位置している東アジアが戦争になってしまう、あるいは日本が位置している北西大西洋が戦争になってしまう、こういうことが起きたら、我が国が生きていく先程の仕組みは動かなくなります。あるいはまた、世界の政治経済の秩序が崩れてしまったら、日本が生きていく仕組みは動かなくなってまいります。あるいはまた、日本が世界の信用を失って、日本は、ただおカネもうけのエゴイストだと世界から見られて、世界からつまはじきされる国家になってしまったら、我が国自身が生きて行く仕組みは動かなくなってまいります。このことはすぐご理解いただけると思います。

すなわち、そのことは逆に、日本は自ら生きていく仕組みを立派に機能させていくために、世界の平和の維持、東アジアの平和の維持、世界の政治経済の秩序の維持、世界から信用される国家となるあらゆる努力を日本はしていくべきであります。なんとなれば、それが日本が生きていく仕組みを円滑に動かしていく不可欠の条件であるからであります。このことは、「国家としての、外に対する、世界に対する国際的な対応」というものを、日本はしっかりやっていかなければなりませんし、それが一番大切な問題であると思います。国際的対応というのは何か、それは国の外交もそうであります、世界との通商もそうであります、世界に対する経済協力もそうであります、世界との文化交流もそうです、国家の安全保障もそうです。こういう国の外に対する問題、この国際的な対応を国家がしっかりやっていくことが、日本自身が生きていく仕組みを円滑に立派に動かしていく不可欠の条件であります。

これをもっと別の言葉で表現しますと、二十一世紀に向かって、日本国家のあるべき方向の一つは、国際的な国家になっていくことです。他人のためではない、自分のために絶対必要なのです。その次は、皆さん、生きていく仕組みを頭の中に置いてお考えいただいて、第二に必要だと思いますことは、国内の社会の在り方です。ヨーロッパの先進国が、今や先進国病にかかっています。働くよりも失業保険をもらおうという社会の空気、これが先進国病の象徴的な現れであります。今や、あの質実剛健だったドイツまでが、若い人は働くよりも失業保険をもらおう、そういう空気になってまいりますと、事業をやっている者は当然、新しい開発とか新しい投資は手控えてしまいます。ドイツの経済社会全体は停滞をしてしまっています。ドイツ人自身が先進国病にかかったと言っています。日本は二十一世紀に向かっても働く国民でなければならないと思います。そして努力する国民でなければならないと思います。そしていかに老齢化社会になっても活力のある社会でなければならないと思います。日本が働かない国になり、活力のない社会になってしまったら、先程申しました生きていく仕組みが動かなくなってまいります。

ヨーロッパの先進国は皆、国家としての蓄積（厚み）とか個人としての蓄積は日本よりもはるかに厚いのです。日本は国家としての蓄積、個人としての蓄積は極めて薄い国です。働いて付加価値をつくっていく、それによって国が生きていける国家なのであります。このことは、国の方向としてどうなければならないかということを一言で表現しますと、日本の一つの方向は「活力のある福祉国家でなければいけない」と思います。最近言われる、成熟社会とか半爛熟とか、そういう言葉のニュアンスの日本になったら、日本は生きていけなくなるのであります。日本はあくまで働き、努力し、活力を持って福祉国家でなければならないと思います。私は今ここで、我が国の特質というものから関連しまして、我々の国家はどういう仕組みで生きているのか、我々国民はどういう仕組みで生きているのか、我々国民の生活はどういう仕組みで確保されているかを申し上げ、それが動いていくようにするためにはどうあるべき

かということで、一つは日本の方向は国際的国家でなければならない、もう一つは活力のある福祉国家でなければならないと申し上げたわけであります。

この国際的国家たるためにも、あるいは活力のある福祉国家たるためにも、これから先、要は「人づくり」が第三の大きな問題であると思います。国際的国家、あるいは活力ある福祉国家、日本国家の方向はその二つです。それを立派にやっていくために、第三の大きな不可欠の問題は「人づくり」です。ところが、皆さまご承知のとおり、我が国の教育は半ば荒廃していると言われています。新聞を見ていましても、少年、少女の非行、あるいは校内暴力とか、あるいは家庭内暴力とかいうことがしょっちゅう起きています。のみならず、刑事犯罪に問われる少年の犯罪件数はどんどん増えつつあります。

一方において学校教育を見ますと、義務教育も高等教育も、ややもしますと知識の詰め込みになっているきらいがあります。いい大学へ入っていいところに就職するというところが目標で、小学校のころからそこに目標を置いて詰め込まれていく傾向がなしとしません。社会に出て、人の信頼を受けて、与えられた仕事をしっかりやっていくためには、単なる字引きのような頭では役に立たないのです。しっかりした体力を持ち、また知力を持ち、また判断力を持ち、強い意志を持って、そして心温かい情操を持って、そういう一つのバランスした人間形成されたものでないと、社会に出て多くの信頼を受けてやっていくことは、なかなか難しいと思います。全部が全部はできなくても、知識偏重では社会に出て国家社会に役に立つことはできないと私は思います。古い言い方かもしれませんが、知、徳、体、情、こういう一つの総合された自分をつくっていく必要があると思います。和敬塾の和敬というこの精神、これは実社会に出て大変大切な問題であると思います。そういう観点から我が国の学校教育という問題を見ますと、いろいろ問題がある。あるいはまた、およそ教育というもの、大学というものは神聖でなければなりません。私立大学が、国の補助金をもらうために帳簿を二重にも三重にもしていることが、学校の管理、経営におけるいろいろの不祥事件を起こしています。これも皆さんご承知のとおりです。

私は中央教育審議会にいますが、明日もその会議がございます。義務教育の六・三・三を直すべきだという意見、これはあります。しかし、今の我が国の教育全体の中で六・三・三を仮に五・四・四にしたから教育全体が立て直るとは考えられません。六・三・三はもちろん悪いところがあれば直すべきでありますが、我が国の教育、我が国の、特に二十一世紀を展望した人づくりを立派にやっていくためには、どうしてもここで家庭の教育、学校の教育、社会全体の在り方、国の教育行政全体、これらを総合して、しかも国民的な課題として一回見直すべきではないかということを、私は痛切に感じています。一部のことをいろいろ手直ししても、この半ば荒廃している我が国の教育を直すことはなかなか難しいのではないかと思います。なにも右傾化する必要もなければ、まして軍国化する必要は毛頭ございません。この日本を二十一世紀まで立派につないでいくためには、今、いろいろ荒廃していると言われる日本の教育を、どうしても健全化する必要があるように思われてなりません。いずれにいたしましても、先程来申し上げましたことは、日本の将来の方向は、国の在り方は、国際的国家と、活力ある福祉国家と、この二つであり、これを実行していく上において欠くべからざる一番大事な問題は、人づくりであると思います。

人づくりの問題で一言付け加えさせていただきます。これから二十一世紀に向かって国際的国家たるためには、国際人が日本でもっともっと出てこなければなりません。国際人ということは、ややもしますと、英語がペラペラで、洋食のマナーが立派で……そういうふうにとられやすいのでございますが、私は国際人とい

うことで皆さまに申し上げたいと思いますことは、これも世界に出て私の体験でございますが、立派な国際人たるためにはまず立派な日本人でなければなりません。自分の国を愛し、自分の国に誇りを持って、自分の国の文化と伝統について愛着を持ち、理解を持って、そういう立派な日本人であって初めて外国の人たちから信頼される国際人たり得るのであります。

我々の先人で、明治以来の、例えば福沢諭吉先生とか、あるいは新渡戸稲造先生とか、あるいは夏目漱石さんとか、あるいは南米に行ってもアフリカに行っても、いまだに大変な尊敬を受けています野口英世博士にしましても、あるいは戦後の吉田茂首相にしましても、皆、世界から大変な評価をされている国際人であります。しかし、この方たちはだれよりも立派な日本人です。我々が外国の人と接して、その相手の人がその母国をけなすようなことを言いますと、信頼できなくなります。これから先、国際的国家たるためには本当の国際人が日本にもっともっとできてこなければなりません。ただそれは上っ面の国際人ではなくて、まず立派な日本人であることが先決であります。その上に立って語学もでき、相手を理解する知識を持ち、そして世界の人と仲よくやっていける国際人でなければならないと思うのであります。

与えられました時間を過ぎましたが、いろいろ申し上げればきりがないのでございまして、私ども今、中曽根総理大臣の指示の下に一生懸命取り組んでいます行政改革のことも、行政改革というのは目的ではございません。先程来、私が申し上げました日本国家のあるべき姿、それが目的でありまして、そのためには、そのプロセスとして、その手段として行政改革をやっているのでございます。なかなか大変な仕事であります。総理大臣は政治生命をかけて、この行政改革の推進に当たっておられます。また八十七歳の土光さんは、執念のごとく、最後のご奉公だと言って、今日も朝からこちらへまいりますまで会議に出てきておられます。この行政改革は先程来申し上げました、日本国家のあるべき姿に一歩でも近づけていくための手段でございます。

どうか皆さん方は、この上とも、まずしっかりした体としっかりした意志を鍛えていただいて、知力ある、判断力のある、情操豊かに人と交わっていける自分を自らおつくりいただいて、国家社会のために尽くしていっていただきたいと思います。そのことを最後にお願いをいたしまして、私のお話を終わります。ありがとうございました。（拍手）

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。